

体験談におけるカラ・ノデの機能の違いについて

小玉 安恵(カリフォルニア州立大学サンノゼ校)

1. はじめに

体験談が語る価値があり (reportability), より聞き手を惹きつける効果的な語りになるためには、話の内容自体が面白いだけでなく、Labov (1972) の評価という要素が重要であると言われている (Cortazzi and Jin 2000:103). Labov (同左:371) によれば、語る価値とは聞き手にとって話が意外性のあるものであることであり、評価とはその話の意外性を伝える手段であるとされている。その評価方法には語り手が物語の進行を一旦止め、その出来事の評価を聞き手に明示的に伝える外在的評価 (external evaluation) と、ナラティブ内で相対的に使用頻度の少ない文法を用いることによってその出来事の相対的重要性を暗に示す内在的評価 (internal evaluation) がある。この後者の評価装置については、否定 (Yamada 2003) や事実用法のタラ・ソシタラ (加藤 2003¹, 金田他 2018), 歴史的現在形 (小玉 2011) などが取り上げられ、その評価的機能が明らかにされている。しかしながら、Labov が内在的評価装置として挙げている因果の接続詞 since や because, それに匹敵する日本語の接続助詞カラ、ノデの評価装置としての機能はまだ検証されていない。さらに、因果の接続詞は元来事態間の論理的で不可避的な展開や関係をマークすることが本務であり、話の展開に信憑性を与える重要な論理的構成要素であるとされている (Causality in Labov 1997:408)。つまり、因果の接続助詞はタラ・ソシタラや否定などの評価装置とは対照的に想定内の展開を示すことが想定されているのである。ならば、なぜ Labov (1972) は因果の接続詞を although や while などの逆接的接続詞と同様、評価装置の代表例として挙げたのか。本研究では、因果の接続助詞カラ・ノデの話の展開の仕方や意外性を表す評価との関わり方を検証する。

2. ノデとカラの違いに関する先行研究

日本語教科書 (ex. An Introduction to Advanced Spoken Japanese) や国立国語研究所の「日本語の文法(下)」(1981) などに代表されるように、従来ノデは客観的な原因理由を、カラは主観的な原因理由を表すと説明されてきた。その先鋒となった永野 (1952:38) によると、ノデとカラの違いは以下のように説明されている。

「から」は表現者が前件を後件の原因・理由として主観的に措定して結び付けられる言い方、「ので」は前件と後件とが原因・結果、理由・帰結の関係にあることが、表現者の主観を超えて存在する場合、その事態における因果関係をありのままに、主観を交えずに描写する言い方である (:38)。

それに対し、国広 (1992) はノデをノダの変異形として捉え、従来の説とは対照的にノデが主観的かつ間接的な接続助詞で、カラが客観的かつ直接的な接続助詞であるとし、カラはそのぶっきらぼうな印象から客観的であり、ノデはその間接性(ノ)と主観性(ダ)によって丁寧で柔らかい性質を帯びることになると主張した。これらは、ノデとカラの違いを主観性と客観性という概念によって説明しようとしている点で共通性を持つが、これらの見解の相違は、一体主観や客観、あるいは直接性間接性とは何なのか、はたまた因果関係とは何なのかという、関係する全ての観念への根本的な問いをもたらした。哲学の分野においては、因果とは何かはまだ完全には解決を見ていないテーマであり (一ノ瀬 2001), Hume (2011) によれば、因果関係とは話し手の過去の経験に照らし合わせて結び付けられた二つの事象の近接的で恒常的な結合関係に過ぎず、その連結は話者の期待や思考の癖というような思い込みに基づいた関係であるとされている。その一方で、国広 (同上) のノデをノダの変異形として捉える見方は、認知言語学や関連性理論に基づいた池上 (1987), 菊池 (2000) や名嶋 (2007) 等によるノダの研究が明らかにしているように、ノデがノダと同様、話者の主観である因果関係を聞き手も体験しその関係を了承しているかのような間主観的なものとして提示する可能性を示唆している²。

¹ 加藤 (2003) は事実的なタラ、ソシタラはテ形に次ぐ使用頻度を持ち、意外性という評価及び心的態度の表示機能は後件述語のコントロール不可能性という統語的・意味的性質に基づくものであるとしている。

² 本稿では、体験談という語りにおける主観的・客観的という術語を、話者が認識の場面の中に認識主体である自己の客体化の度合いと時空間的な視点の二つの観点から用いる。最も主観的な語りとは、自己が客体化されておらず物語世界の今ここの視点から語られる語りで、最も客観的な語りとは自己が客体化

その他にも、山本(2001)など、ブラウン&レビンソンの丁寧さの原理からそれぞれカラが積極的丁寧さ(positive politeness)を、ノデが消極的丁寧さ(negative politeness)を示すとし、それらの違いを丁寧さの原理によって説明しようとする試みもある。

本稿では、新しいアプローチとして、口語の体験談を分析の対象とし、口語ナラティブにおけるカラ・ノデの使われ方を、ラボビアンモデルを用いて話の展開や評価という観点から分析していくことで、それらの機能の違いを明らかにする。

3. 本研究のデータと研究方法

テレビ番組「ごきげんよう」から取った44の芸能人の体験談をラボビアンモデルでナラティブ構造分析し、まず、接続助詞カラ・ノデがそれぞれナラティブの全体構造においてどの部分によく現れるかをみた。それらは話の登場人物、時、場所及び初期状況について述べるオリエンテーション部、実際に物事が動き始め結末を迎えるまでのコンプリケーション部(以後CA部)と、結末の出来事を述べて以後話が終了するまでの終結部(Coda)である³。次に、特にデータの最も多いCA部内の節構造のうち、オリエンテーション節、コンプリケーション節(以後CA節)、出来事への評価や心情を述べる評価節のうちどのタイプの節によく現れるのかを見た。さらに、前件であるカラ節ノデ節と後件の間で、主語人称が登場人物である「私」の1人称と、事物や第三者の登場人物を含む3人称の間でどのようにシフトするかを見た⁴。最後に、体験談におけるカラとノデの使われ方の違いを具体的な例を基に質的に分析した。

4. 分析結果

44の体験談の中にはノデ45、カラ72の使用例があった。平均するとノデは一話につき1個、カラは1から2個という使用頻度である。これは、使用頻度に基づいた有標性をその評価のメカニズムとする内在的評価装置としては、適当な頻度であると思われる。44話中、カラ・ノデの使用のない体験談は6話あり、ノデのみのものが11話、カラのみのものが14話、カラ・ノデが両方使われている体験談は13話あった。カラ・ノデの現れたセクション及び節構造は以下の通りである。

表1 セクション毎に現れるノデ・カラの割合

	オリエンテーション部	コンプリケーション部	終結部	計
カラ	7 (9.7%)	61 (84.7%)	4 (5.6%)	72 (100%)
ノデ	9 (20%)	35 (77%)	1 (2.2%)	45 (100%)
計	16	96	5	117

表2 CA部に現れる節の種類毎のノデ・カラの割合

	オリエンテーション節	コンプリケーション節	評価節	計
カラ	22 (36.1%)	25 (41.0%)	14 (23.0%)	61 (100%)
ノデ	18 (51.4%)	8 (22.9%)	9 (25.7%)	35 (100%)
計	40	33	23	96

これらの結果からは、カラよりもノデが後景となるオリエンテーション部やオリエンテーション節により使用されていること、一方、カラはナラティブの前景となるCA部のCA節により多く現れていることが分かる。

次に、カラ・ノデで結ばれる前件と後件の人称の変化を見てみると、カラ・ノデ共に3人称から1人称へのシフトが最も多く、ついで1人称から1人称で、3人称から3人称へのシフトは少なく、1人称から3人称へのシフトに至っては観察されなかった。これらのことは、カラ・ノデが共に体験談において自己の状況や行為、評価の正当化に使用されていることを示している。

されており語りの世界の視点から語られる語りである。そして間主観的とは主観的な見えが他者と共有されていることを指す。本稿においては、話者による複数の事象間の因果関係の主観的認定を示すカラ・ノデは、主観客観の別ではなく、主観・間主観の別に関わっていると考えられる。

³ ラボビアンモデルではこの他、結末部(Resolution section)と評価部(Evaluation section)があるが、本研究ではCA部と結末部を分ける必要性がないため結末部はCA部に含まれている。評価部は結末部の前にある場合はCA部内、結末部の後にある場合には、終結部に含まれている。

⁴ カラ・ノデの直後に挿入節がある場合には、その後にある意味的に繋がる節を後件として認定した。

表3 ノデ・カラの前件と後件の人称の割合

	3 人称→1 人称	1 人称→1 人称	3 人称→3 人称	計
カラ	36 (50%)	25 (34. 7%)	11 (15. 3%)	72 (100%)
ノデ	20 (44%)	23 (51. 1%)	2 (4. 4%)	45 (100%)
計	56	48	13	117

さらに、これらのそれぞれの例を見ていくと、CA 節のカラノデの3 人称から1 人称にシフトする場合に、その使われ方に差異が見られた。カラの場合、ル形のカラ節内の3 人称の言動に、意表を突かれてどう反応したらよいか迷っていたり、意味がよくわからないにもかかわらず、とりあえず言われた通りにしたりする場面が多いのに対し、ノデは予想通りの展開になっていることである。例えば、以下の場面では、登場人物の「私」は、夫婦喧嘩の最中に妻に苦手なことを問われ、それが意表を突いた質問だったため、登場人物の「私」は答えに窮した後に、自分の苦手なことを答えているのだが、この答えがのちに妻の突然のイギリス留学という予想もしていなかった事態へとつながっていく。

【英語(カラ) : 3 人称から1 人称へ、(ノデ) : 1 人称から1 人称へ】

N : ほんとにささいなことでなんかこうかみさんを言いくるめたら (CA) 1

M : うん.

N : 「いつもあなたはえばってる」と (CA). 3

M : ほう.

N : で、「私はあなたの苦手なことを一つでもいいから、あなたより上のことを作りたい。」って話し始めて. (CA) 3

M : はあ.

N : 「あつ、そりゃーいいことだから、すばいいいじゃん。」 (CA) 1

で「苦手なこと何？」って言うから (CA), 3

「何かなあ?

一番苦手なのは英語が全く喋れないのでー (O), 1

英語とかだめだよ」って言ったら (CA), 1

「私絶対あなたより英語上手になる.

M : おー.

N : 私の得意分野にする。」って言うんですよ (CA). 3

それに対してノデの場合、以下の例のように、登場人物でありかつてアイドル歌手だった「私」が病気で医者に行った際、医者が通常聞く質問にノデが使用されており、後件では 病状を説明している。

【素顔(ノデ) : 3 人称から1 人称へ】

N : そいでもって「そいでまた今日はどうしましたー？」って言うんで (CA)

「あつ、風邪引いちゃってちょっと調子が悪くて。」 (CA)

「あつ、そうですか、僕同世代なんですよー。」って言われて.

また以下のように引用以外の例でも、カラの場合は、相手の行動が登場人物の「私」の予想と異なっていたため、その相手の行動の意図が読み取れないまま、とりあえず相手に言う通りにする場合に使われている。以下の場面は、ゴルフ場への行き方の分からない「私」が先輩と待ち合わせて、一緒に車で走ろうとしている場面である。

【ゴルフ(カラ) : 3 人称から1 人称へ】

N : して、平松さんの車来たんですよ. (CA)

M : あっはいはい.

N : 「おっ」ってしたら, (CA) 1

パーッと走ってくるんですよ, 急に. (CA) 3

「行くぞ」って

M : うーん.

N : 「行くぞ」って言えばいいのに, (E)

は, 走ってきて, (Repetition CA)

こうやってやるから, (CA) {車の窓を開けるように指示する仕草} 3

ほいでブーっと開けたんですよ. (CA) 1

「あーどうしたんですか?」って言ったら, (CA) 1

「お前顔色悪いよ。」って言うんですよ. (CA) 3

<N=語り手, M=司会者, ー=長音, { }=ジェスチャー, 1=一人称, 3=三人称()=節構造, CA=CA 節, E=評価節, 0=オリエンテーション節>

5. おわりに

本稿では、44の体験談をラボビアンモデルで量的にかつ質的に分析することにより、話の展開や評価という観点からカラノデの機能の違いを明らかにすることを試みた。その結果、ノデはカラよりも背景となるオリエンテーション情報に起こりやすいこと、カラはノデより話の前景となるCA節に起こりやすいこと、また前件と後件の主語のシフトの仕方から両方とも登場人物「私」の状況、言動、評価の正当化に使用されていることがわかった。またその一方で、そのCA節においては、ノデは予想通りの展開に使用されているのに対し、カラの場合は、話者にとって予想外の第三者の言動にル形と共にカラが用いられていることが判明した。これは、カラ節が構造的にも独立しており、因果関係を自分の個人的な主観として提示するため予想外の出来事をマークし強調できるのに対し、ノデは聞き手もその因果関係を体験し了承しているかのように提示する間主観的な接続助詞であるが故に予想外の展開には用いられないからだと思われる⁵。

参考文献

- Cortazzi, Martin & Lixian Jin. (2000). Evaluating Evaluation in Narrative. In Hunston, Susan and Geoff Thompson (eds.), *Evaluation in Text: Authorial Stance and the Construction of Discourse*. pp. 102-219, New York: Oxford University Press.
- Hume, David & Selby-Bigge, L. A. (2011) An Enquiry concerning human understanding and the principles of morals. *An Enquiry Concerning Human Understanding*. <http://www.gutenberg.org/files/9662/9662-h/9662-h.htm>
- 一ノ瀬正樹(2001). 原因と結果の迷宮 東京、勁草書房
- 池上嘉彦(1986). 日本語の語りのテキストにおける時制の転換について. 記号学研究 6, 61-74.
- 金田純平他(2018). 笑い話における言語・非言語行動の特徴-関西の一般人と関西芸人の比較から- 定延利之(編) 限界芸術「面白い話」による音声言語オラリティの研究. ひつじ書房, pp. 130-147.
- 加藤陽子(2003). 日本語母語話者の体験談の語りについて: 談話に現れる事実的な「タラ」「ソシタラ」の機能と使用動機. 世界の日本語教育 13, 57-74.
- 菊池康人(2000). のだ(んです)の本質 東京大学留学生センター紀要, 10, 25-51.
- 小玉安恵(2011). 体験談における歴史的現在形の機能と視点. 日本語教育 148, 114-128.
- 小玉安恵(forthcoming). 非難の因果構文におけるル形の生起条件と非難のニュアンスのメカニズム.
- 国立国語研究所(1981). 日本語教育指導参考書5 日本語の文法(下) 東京: 大蔵省印刷局
- 国広哲弥(1992). 「のだ」から「のに」・「ので」. カッケンブッシュ寛子他(編) 日本語研究と日本語教育 名古屋大学出版会, pp. 17-34.
- Labov, William. (1972). The Transformation of Experience in Narrative Syntax. In *Language in the Inner city: Studies in the Black English Vernacular*. pp. 354-396, Philadelphia: University of Pennsylvania Press.
- Labov, William. (1997). Some Further Steps in Narrative Analysis. *Journal of Narrative and Life Story* 7, 395-415.
- 永野賢(1952). 「から」と「ので」はどう違うか. 國語と國文学, 29(2), 30-41.
- 名嶋義直(2007). ノダの意味・機能—関連性理論の観点から—. くろしお出版.
- 田窪行則(1987). 統語構造と文脈情報. 日本語学, 6(5), 明治書院, 37-48.
- Yamada, Masamichi. (2003). The Pragmatics of Negation: its Functions in Narrative. Hitsuji Shobo
- 山本もと子(2001). 接続助詞「から」と「ので」の違い—丁寧さによる分析—. 信州大学留学生センター紀要, 2, 9-2

⁵ 田窪(1987)は、カラ節のみがノダが文末に来ることによって初めてカラ節内の情報が焦点化される構造になりうることを、小玉(forthcoming)は、カラ文の後件文完成テストを日本語母語話者に対し行った結果、前件の内容にかかわらず、ル形のカラ節はタ形のカラ節の場合よりも望ましくない因果関係を日本語母語話者に想起させると指摘している。